

東アジア文明の黎明

2014年2月1日 駒澤大学最終講義

飯 島 武 次

はじめに

東アジア地域は、北はモンゴル高原から南はベトナム・メコン河流域、西はタクラマカン砂漠東辺からチベット高原、東は朝鮮半島・日本列島に到る。この東アジアの東地域には、風土・生業・言語などに多様性を持ちながらも、粟・稲栽培、養豚、禮制・儒教、仏教、都城制、漢字など共通の文化によって結ばれた東アジア世界が形成されてきた。そこに生まれた東アジア文明の中心となってきたのは中国で、東アジア文明は中国発祥の文化とも言える。東アジア古代文明の源流は黄河・長江流域に発生し、中華文明・中国文明の名で呼ばれることもある。「文明」の単語は、『易経』乾・文言伝に「天下文明」とあるのが古く、⁽²⁾戦国・秦漢時代頃から用いられていた可能性がある。近代の考古学用語としての「文明」は、「CIVILIZATION」に当てはめた用語であるが、東アジア文明は考古学の上から見ると旧石器時代にその遠い淵源を求めることが出来るが、中国文明の成立は、はるか後の夏殷周三代の時代に入ってからである。

1 中華文明の培養の時代

東アジア文明の源流を考古学的にたどると、それは、300万年以前の人類発祥の時代にたどり着く。仮に人類の歴史をその300万年と仮定すると東アジアの文明の時代は、その最後の4000年間足らずで、わずか0.13%ほどの時間である。人類の歴史の99%以上の時間を占めている旧石器時代は、もっぱら打製石器を利器として用いていた文化である。その時代の北京原人の話などを今日は省略させていただくが、この時代は、旧石器時代前期・中期・後期に分けられ、後

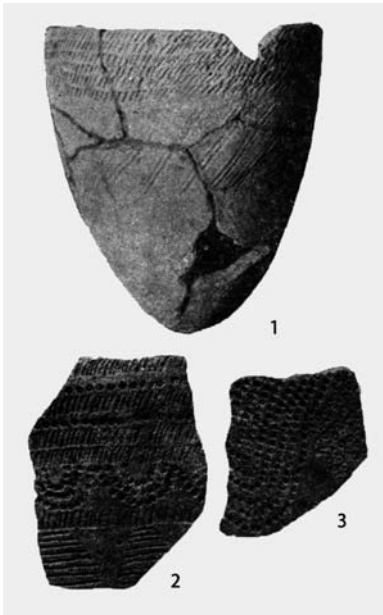
期は中国の年代観で、おおよそ7(5) 万年前から1万1千年前と考えられている。日本列島にも、確実に旧石器時代後期に併存する遺跡が存在している。

東アジアの人類が、文明に到る直前の時代は巨視的に見ると新石器時代であると言って良いであろう。その文化は、利器として打製石器のほか、磨製石器を用い、穀物栽培を行い、煮沸器として土器を使用した。中国の新石器文化は、文明へ向かって東アジア人類の文化を培養した時代で、黄河や長江の流域に出現した穀物を栽培する原始農耕文化の時代であると見ることが出来る。中国の新石器時代前期の開始時期は、おおよそ11000年以前頃と推定され、この年代は大理水期終了直後にあたると思われる。この時期からやや下がる江西省万年県仙人洞遺跡において初期の磨製石器や土器が発見され、また湖南省道県玉蟾岩遺跡で鋤形石器や尖底土器が発見されている(第1図)。この時代、日本はおおむね縄紋時代早期の撚糸紋・押型紋の時代に当たる。若干時代が下がるようであるが、韓国ソウル市の岩寺里遺跡等においても尖底土器が発見されている(第2図)。

新石器時代前期にすでに農耕技術水準の比較的高い穀物栽培が行われて、広い地域で豚の飼育も行われていた。新石器時代前期後半に入ると黄河流域に河北省武安市の磁山遺跡や河南省新鄭市の裴李崗遺跡などの遺跡が出現し、石磨盤・磨棒・石鏟・石鋸齒鎌がきわめて特徴的な道具として使用され、粟の栽培



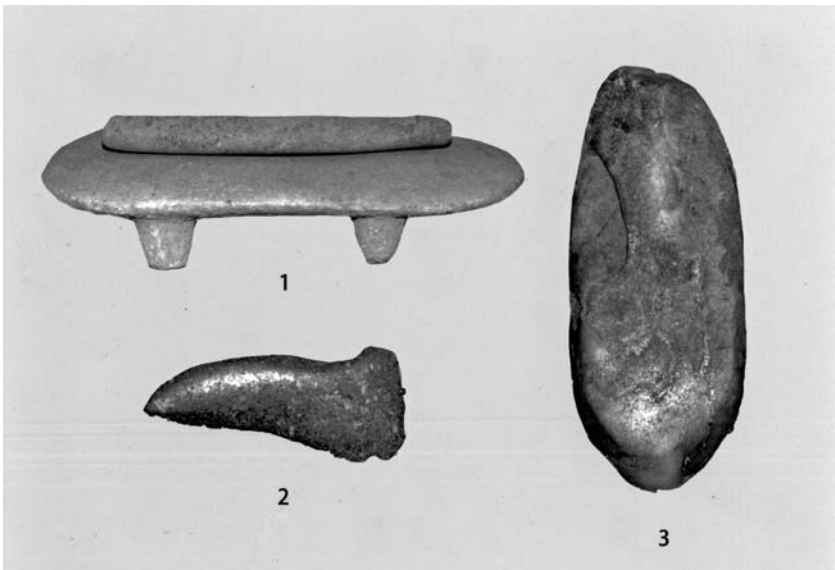
第1図 土器 左. 仙人洞遺跡出土、右. 玉蟾岩遺跡出土



第2図 土器 韓国岩寺里遺跡出土

が行われた(第3図)。また長江中流域の湖南省澧県の彭頭山遺跡や湖北省宜都市の枝城北遺跡では、植物遺物としての稲の籾殻が発見されている。前5000年前後と考えられる浙江省余姚市の河姆渡遺跡からは大量の稲遺物が発見され、大規模な水稻栽培の存在が確認され、河姆渡遺跡や田螺山遺跡からは、耕具としての骨耜が多数出土している(第4図)。日本は縄紋時代早期・前期初頭の花積下層式・関山式の時代かもしれないが、当然のこととして稲作農耕は行われていない。

稲栽培文化は、やがて朝鮮半島・日本列島にも拡大していくが、中国における

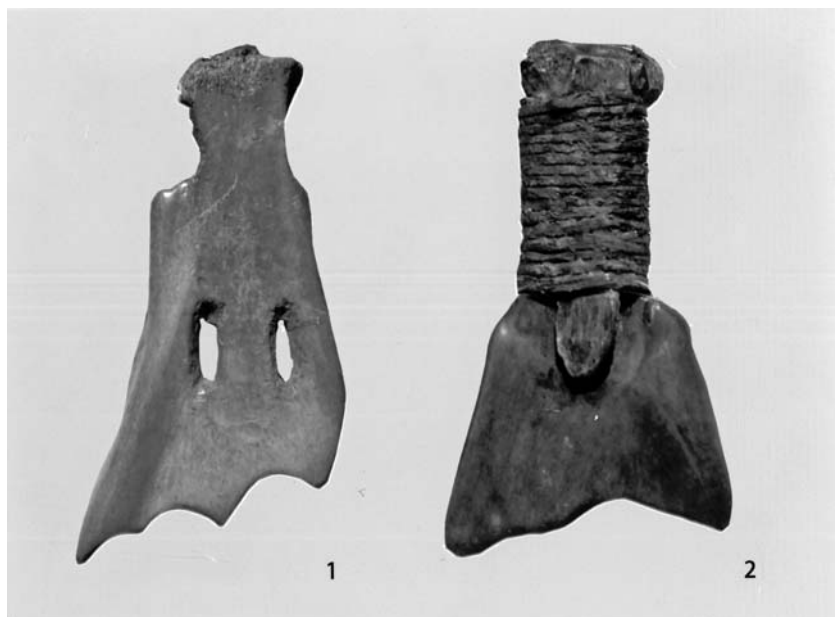


第3図 石器 1.石磨盤、2.石鎌、3.石鍬、裴李崗遺跡出土

新石器文化は、西アジア・エジプトの小麦栽培の文化や、中南米のトウモロコシの栽培文化とは異り、黄河流域の粟栽培文化と長江流域の稲栽培文化を特色とする。中国文明の源流を遠くたどれば、直接的にはこの時期に源流がある。

新石器時代中期文化は、土器の上で彩陶を指標とする事が出来、年代的には前5000年から前3000年頃と考えられている。黄河中流域で、新石器時代中期を代表する文化は仰韶文化であるが、この文化は紅陶と比較的多くの彩陶を出土することを特色としている。仰韶文化は、粟栽培を中心とした農耕文化で、豚の飼育も極めて盛んであった。豚の飼育も東アジア共通の畜産となっている。朝鮮半島では櫛目紋土器の時代、日本関東地方で言えば、縄紋前期・中期、黒浜式・諸磯式・勝坂式などの土器によって代表される時代である。

長江中・下流の新石器時代中期文化は、馬家浜文化・大溪文化・屈家嶺文化によって代表され、何れの文化も稲作を生業の主体としている。長江下流域の馬家浜文化は、馬家浜類型と崧澤類型に細分される。馬家浜類型の土器には、夾砂紅陶と泥質紅陶があり、彩陶も見られる。崧澤類型の土器には夾砂紅陶、



第4図 骨耜 河姆渡遺跡出土

泥質紅陶のほか泥質黒皮陶や泥質灰陶が見られる。大溪文化の土器にも、多くの彩陶が存在する。屈家嶺文化は、年代的に龍山文化前期に併存する文化であるが、土器に彩陶が認められ、また龍山文化との共通の要素が少ない。長江流域では、新石器時代中・後期に入って急激に稲栽培技術が向上している。農耕における稲栽培は、東アジア文化の共通の要素となっている。

新石器時代後期に入ると黄河流域から長江中・下流域にかけて共通性の極めて強い文化内容を持った良渚文化・龍山文化と呼ばれる文化が出現してくる。この文化の共通要素としては、土器胎土における泥質灰陶・夾砂灰陶、卵殻黒陶・泥質黒陶の存在、土器地紋の籃紋・方格紋の普遍化、轆轤や回転台の出現、圈足・三足器の増加、磨製石器・貝器の増加、卜骨の流行、少量の純銅・青銅など金属の出現、集落を取り囲む土塁・土壁・隔壁の出現などが指摘できる。



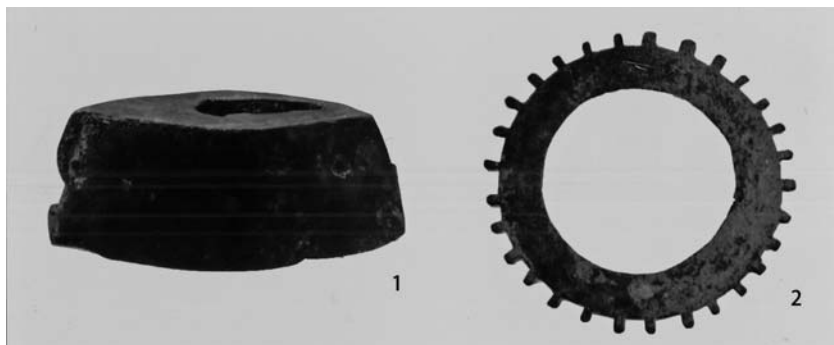
第5図 彩画蟠龍紋陶盤 陶寺遺跡出土

長江下流域の新石器時代後期を代表する文化は、良渚文化である。良渚文化は、高度な稲作農耕を行い、東西1500～1700m、南北1800～1900mの大規模な環状土塁遺構を有し、玉斂葬と呼ばれる多くの玉器を副葬した墓を残し、出土遺物には黒陶・玉琮・玉鉞・玉璧などがある。良渚文化の年代は、前3000～前1800年が推定され、日本列島の稲作文化開始時期との間には年代的な隔りがあるが、良渚文化の稲作農耕の伝統が時間を経過した後、日本列島に伝播したと考えてよいであろう。

黄河流域の龍山文化後半の時代には、諸地域に於いて少量の純銅・青銅などの金属器が発見され

るため、この時代を既に新石器文化が終了し、金石器併用時代あるいは金属器時代に入っているとする説が有る。しかし、龍山文化における金属の使用量は、石器・骨角器の使用量に比べて極めて微量で、ごく微量の金属器が社会、経済に与えた影響はほとんど無かったと推定される。山西省の山西龍山文化陶寺類型は、古代国家出現直前の文化と見ることができるが、あわせて中華文明誕生直前の文化と見ることができる。陶寺遺跡の遺構の中で特に注目されるのは、墓とその副葬品である。M3002・M3015・M3072号墓などの6基の大墓からは、彩色を施した木棺が発見され、彩画蟠龍紋陶盤（第5図）・彩画陶壺・石磬・鼉鼓・大型石製庖丁・木豆・木俎（まないた）・豚骨が常に出土している。中型墓のM3296号墓からは純銅の鈴が、M11号墓からは青銅の腕環が出土し、陶寺類型文化がすでに若干の金属器を有していたことを示している（第6図）。

龍山文化の遺物の中に確かに文字であると断定出来る遺物は発見されていない。しかし、山西龍山文化に属する陶寺遺跡出土の扁壺には、文字に類似した符号が書かれ、また龍山文化に属する山東省鄒平県丁公遺跡や良渚文化に属する黒陶にも文字に類似した刻画記号が刻まれている例は多々ある。ただこれらは、未だ文字とは言えず、確かな文字は殷代後期の殷墟文化期まで待たなければならない。中国の一部の研究者によれば、彩画蟠龍紋陶盤の龍は王の権威を示すものと言い、石磬や鼉鼓も宮室や宗廟の道具と考えられている。黄河流域の龍山文化の年代としては、前3000～前1750年と考えられるが、その中心的な年代は前2500～前1800年である。



第6図 金属器 1.純銅鈴、2.青銅腕環、陶寺遺跡出土

良渚文化・龍山文化の時代は、朝鮮半島ではやはり櫛目紋土器の時代、日本関東地方で言えば、縄紋中期～後期、加曽利E式・称名寺式・堀之内1式などの土器によって代表される時代である。

2 中華文明の誕生

それぞれの国の歴史において、その国の古代国家成立時期は重要な歴史的意味を持つが、中国の場合も例外ではない。新石器時代が終了し、青銅器時代に入ると中国に本格的な文明が出現し、都市を中心とした人類の新しい活動が開始されたと理解される。中国古代文明の出現期には、幾つかの特質すべき考古学的事項が存在する。第1には、宮殿を伴う都市が出現し、版築城壁と大型建築物の造営が開始される。第2には、王陵の造営が開始される。第3には、青銅器の使用が開始される。第4には、文字の使用が開始される。これら四つの事項は、総て古代文明の一つの指標となることがらであると同時に、やがて中華文明として東アジア諸地域の歴史に大きな影響を与えた。

黄河中流域の龍山文化につづく二里头文化は、青銅器時代に入っている。筆者は青銅器時代に入ったこの時代を、仮定される夏王朝の時代と考えている。二里头文化は、河南省偃師市の二里头遺跡を標準とする。二里头遺跡においては、まだ城址は発見されていないが、2基の宮殿址と呼ばれる大型建築址をはじめとして、多数の版築の建築址が、約1.8km四方の範囲内に存在している。1号・2号宮殿址の平面形は、回廊が取り巻き、その中央北側に正殿が位置するが、この平面形は、後の西周時期における陝西省岐山県鳳雛村発見の宗廟建築の形に類似している。二里头遺跡は、完全に出来上がった都市遺跡ではないが、比較的規模の大きな邑であったことは確かで、村落的な集落から都市出現期の過渡期な遺跡と推定される(第7図)。二里头遺跡からは、多くの青銅器が出土している。それらには、爵・罍・盃・鼎などの容器、戈・戚・鏃などの武器、小刀・鏃・鏃・錐などの工具、鈴・円形青銅器・獣面紋牌飾などの楽器・飾金具がある(第8図)。これらの青銅器には、小刀・鏃・錐・戈・戚などの利器つまり刃物が多数含まれ、二里头文化が青銅器時代に含まれる事を示している。青

銅の鼎・爵・罍・盃は、いずれも禮器の器形で、殷代や周代に禮の道具として用いられた容器と基本的に同形である。これら青銅禮器は、古代国家権力による宗教活動を示す遺物で、文明成立の一翼を示す遺物と見てよいであろう。二里頭遺跡の墓からは、牙璋と呼ばれている特異な形をした玉器が複数出土している。玉牙璋は四川省広漢市の三星堆遺跡や香港の大湾遺跡やベトナムの馮原遺跡からの出土が伝えられ、これらの遺物は中原からの文化伝播の結果と推定される（第9図）。また二里頭文化の土器には図象記号と呼ばれる記号状の紋様が存在している。これらの記号は文字とは呼べないが、殷墟文化期の甲骨文字に先行する文字の祖形となる記号と認識される。近年のC14年代測定に対する樹輪校正年代研究を重んじて二里頭文化の年代を見ると、二里頭文化の年代は前1750年から前1500年の値で示され、それは古本『竹書紀年』などに記載された夏王朝の存続期間に含まれる。二里頭文化には、宮殿宗廟区の出現、青銅器の出現、図象記号の出現など、東アジアにおける最初の文明誕生の兆しが見て取れる。あわせて中国の歴史としては中華文明の誕生でもある。この夏王朝の時代は、日本関東地方で言えば、縄紋後期、堀之内2式・加曾利B式などの土



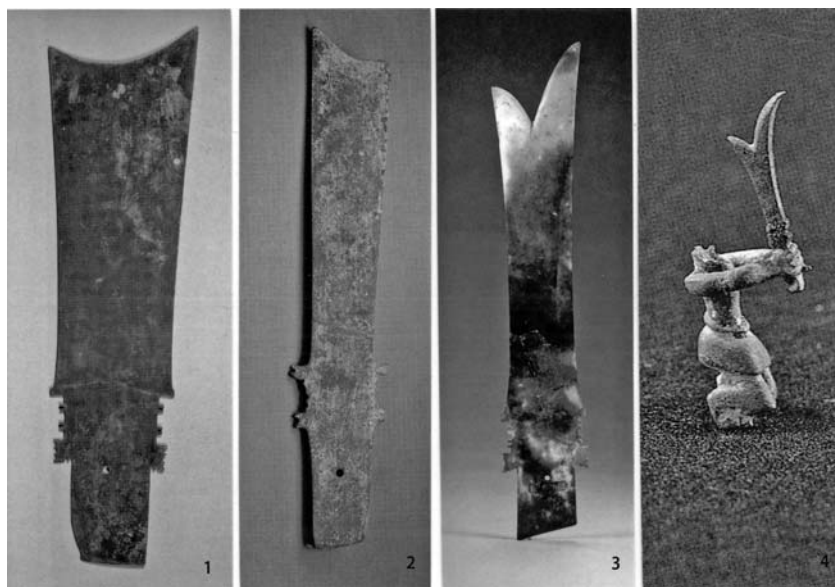
第7図 二里頭遺跡景観



第8図 夏王朝青銅器 1・2.爵、3.斝、4.盃、5.鈴、6.獸面紋牌飾、二里頭遺跡出土

器によって代表される時代である。

河南省鄭州市二里岡遺跡を標準とする二里岡文化は、殷王朝成立期の文化であるが、河南省偃師市で発見されている偃師殷故城は、その時期の遺構で、『史記』殷本紀・『漢書』地理志・『括地志』などの記載によって殷湯王の亳都の遺構である可能性が高いと推定される遺跡である。偃師殷故城は、南北約1710m、東西約1240mの大きさを有し、城内からは、宗廟址・宮殿址と推定される大型建築址が複数発見されている(第10図)。鄭州市でも、二里岡期の版築の城壁が発見され鄭州殷故城と呼ばれている。一辺1700mほどの城壁に囲まれた版築城壁遺構内からは、宮殿址・宗廟址とされる版築の大型建築址が多数発見されている。殷前期の二里岡文化期に入ると、青銅器の量が一気に増加する。鄭州殷故城の内外に残る白家莊遺跡・銘功路遺跡・張寨南街遺跡からは多くの青銅器が出土している。二里岡上層文化期に入ると青銅器の出土地域も黄河流域のみならず長江流域にも拡大し、湖北省武漢市黃陂区盤龍城遺跡などにおいても青銅器が発見されている。



第9図 牙璋 1・2. 二里頭遺跡出土、3・4. 三星堆遺跡出土

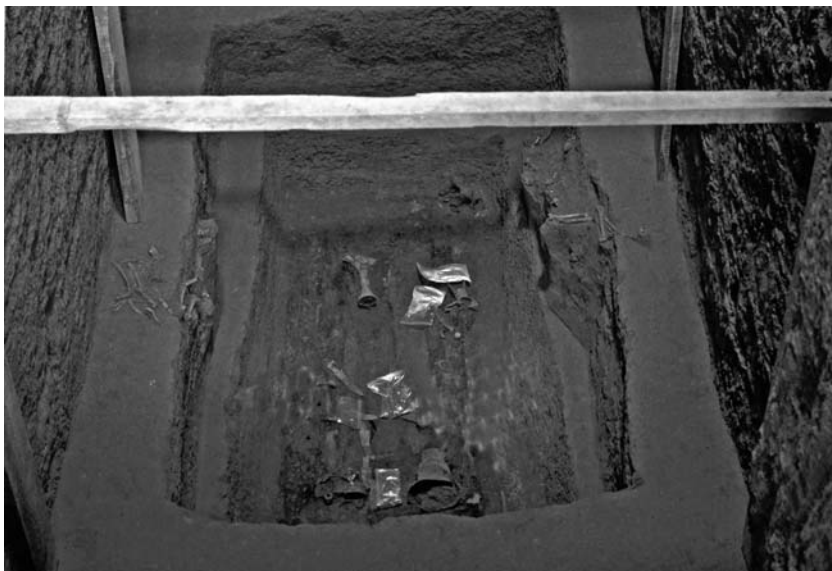
河南省安陽市の殷墟遺跡を標準とする殷墟文化は、殷後期の文化で、一般には19代盤庚から30代帝辛の時代に比定されている。この時代は、東アジアの一角に中国の古代文明が確立した時代でもある。殷墟遺跡は、安陽市西北の洹河兩岸に24km²にわたって広がっている。洹河南岸の小屯村付近の甲組・乙組・丙組（地点名称）と呼ばれる各区画からは多数の宮殿址と呼ばれている版築基壇の大型建築址や墓が発見されている（第11図）。ことに甲組の甲八・甲九・甲七・甲六・甲四・甲五・甲一・甲二・甲三・甲一一・甲一二・甲一三の一群の建造物は、大門・土壁・殿堂・宗廟・明堂などの宮城内の建築群を形成していたと推定されている。安陽市洹河の北岸の侯家莊・武官村の遺跡は、王陵とその周囲に存在する1000基以上の多数の犠牲坑からなり、そこは陵域と祭祀の場であったと推定される。大型墓には、亜字形墓・甲字形墓が存在し、とくに侯家莊の亜字形墓7（8）基と武官村の亜字形墓1基、中字形墓3基、甲字形墓1基の合計12（13）基の大型墓に関しては、あるいは盤庚から帝辛にいたる殷王の墓ではないかとの説も存在する。殷墟遺跡は、行政・経済の中心としての現代都市とは異なる古代都市で、王権と祭祀の中心で祖先に対する祭祀を執り行った



第10図 排水溝発掘 偃師殷故城

場所と推定される。殷王朝の青銅器文化は、中国の歴史の中で西周時代と並んで最も青銅器が成熟した時代である。殷墟文化期における多くの青銅利器の出土は、青銅器文化の名にふさわしい。殷周青銅器は、まさに中国古代文明の象徴とも言える。侯家荘M1004号墓出土の鹿方鼎・牛方鼎、M1001号墓出土の饕餮紋方盃、武官村出土の司母戊鼎（第12図）などを代表として、各種の容器・武器が出土している。特に1976年に小屯村で発掘調査された婦好墓からは、468点もの青銅器が出土し殷墟文化第2期の標準遺物となっている。殷墟遺跡の小屯の東南1kmの苗圃北地では大規模な青銅遺跡が発見されている。1000点以上の鼎や戈など青銅器の陶範と坩堝の出土が報告され、そこが殷王室の青銅工房であったことが推測される。殷墟遺跡の孝民屯においても青銅工房が発見されている。

殷後期の青銅器の分布は殷墟遺跡のみならず、黄河流域から長江流域にまで広くおよんでいる。江西省新干県の大洋洲殷墓からは殷墟文化第1期以前に遡る青銅器が発見されているほか、四川省広漢市の三星堆遺跡からも特殊な人面青銅器を含む青銅遺物が多数発見されているほか、殷墟文化青銅器を模倣した



第11図 体育運動場M93号墓発掘 殷墟遺跡

と思われる尊形器・罍形器が出土し、饕餮紋も存在する。長江流域にも殷の青銅器文化と密接な関係を持つ青銅器文化が存在していたが、これらの青銅器文化は殷墟文化の亜流と捉えることも可能で、また東アジア文明圏の拡大と捉えることも可能である。

殷代には、甲骨文と呼ばれる文字が存在する。甲骨文が出現するのは、殷墟文化第2期の22代武丁時代以降である。甲骨文は、殷墟文化第2・3・4期と存在し、占いの記録と推定される。法律文書や経済文書ではないが、文章を構成している文字である(第13図)。殷墟期には甲骨文の他、青銅器に文字を鑄造した金文も出現する。族記号的な絵文字を除けば、文章としての金文の出現は、殷墟文化第4期からである。殷墟文化の文字資料には、甲骨文・金文の他、陶文・玉石文字などがある。いずれにしる殷墟期には、文明の指標となる文字が甲骨文やその他の出土文字資料として存在している。中国の古代文明を考える上で、殷墟期における文字の出現は特筆すべき事柄である。甲骨文字はやがて漢字へ発展変化していくが、中国・ベトナム・朝鮮・日本などの東アジア諸地域では、この漢字が用いられ、中国古代文明の強い影響の象徴となっている。

甲骨文には、「中商」「大邑商」「天邑商」の単語が散在し、「中商」は4例ほど

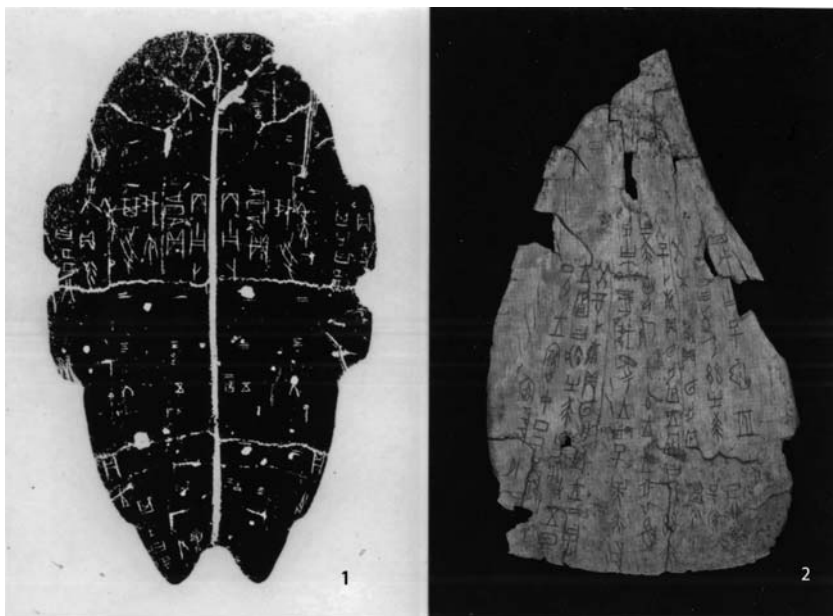


第12図 司母戊鼎

が知られ、「戊申卜王貞受中商年」(甲骨文集20650)⁽³⁾ などとある(第14図)。この「中商」が意味する商の中心、商の中心都市は、後の「中国」「中華」の思想の起源とも見ることができる。また、「大邑商」「天邑商」は殷の都あるいは殷国を意味していると考えられる。

殷王朝時代は、前1500年から前1000年頃の年代が考えられ、日本関東地方で言えば、縄紋後期・晩期、加曾利B式・安行式・大洞B式などの土器によって代表される時代である。東アジアにおける文明圏は、まだ中国内の限られた地域に存在している。

周は、殷代の終わりに渭河中流域から起こった国である。西周時代の主役である周王朝の文化には、もちろん都市・大墓・青銅器・文字など文明の指標が存在する。陝西省岐山県鳳雛村の甲組建築址は、正殿を回廊が取り囲む建築址で、2号室の貯蔵穴内からは西周甲骨文が出土し、周の宗廟建築と推定されている(第15図)。また、この地域で多く発見される窖蔵と称される貯蔵穴からは、古来度々数多くの西周青銅器が発見されている。岐山県の周公廟遺跡祝家巷北



第13図 甲骨文 1.乙編867、2.中国国家博物館蔵、殷墟遺跡出土



第14図 甲骨文 1.合集20650、2.合集20587



第15図 甲組建築址 陝西省岐山県鳳雛村

地点からも西周甲骨が発見され、周公旦の采邑の地との推定もある(第16図)。文王の豊京の位置は西安市の西南約14kmの澧河西岸の長安区客省荘・馬王村・張家坡・西王村の一带と考えられている。付近からの版築基壇や瓦の発見は伝えられているが、都市遺構の発見が乏しい。武王の鎬京、成王の洛邑に關しても、状況は類似している。鎬京は、澧河の東岸の西安市長安区の斗門鎮普渡村付近を中心とした地域と推定され、版築基壇の発見や西周瓦の出土は伝えられるが都市遺跡としての考古学的な確認はまだない。

西周時代には文明の指標である青銅器と文字が、禮器と金文として成熟期を迎える。西周時代の青銅器鑄造技術については、河南省洛陽市で発見された北窯鑄銅遺跡から伺い知ることができる。北窯鑄銅遺跡は、洛陽東駅の北約200mに位置している。遺物として土器の他、大量の陶範(10000点以上)や溶鋳炉壁残片が出土している。

文明の要素の一つとしての文字の存在は、西周時代に入るとより普遍的になっている。周原付近の窖藏からは、多数の青銅器が発見され、その一部の青銅器には銘文が存在し、孟鼎(285文字)・史牆盤(284文字)・毛公鼎(479文字)・



第16図 祝家巷北地点発掘 陝西省岐山県

散氏盤 (349文字) など長文の銘文が存在する。特に史牆盤は、西周前期の重要な史実を述べるだけでなく、文字は優美で、文章も韻を踏み、古典文学の傑作でもある。西周時代には、漢字が青銅器に鑄造され、金文の成熟期を迎えている。西周金文の出土地点は、黄河と長江の流域を中心に広い地域に拡大し、西周金文の出土地点を見れば、西周時代の文字使用が殷代より普遍的であったことは明らかである。1963年に陝西省宝鶏市で発見された「何尊」の銘文中には、「宅茲中国」とあって中国の単語が見られるが、成王の時の文章である (第17図)。これは国の中心、畿内の意味である。『尚書』梓材に「皇天既付中國民越厥疆土于先王」⁽⁵⁾とあり、皇天は中国の人民とその土地を先王に与えた、と解釈されている。また『詩經』大雅・民勞には、「惠此中國」⁽⁶⁾とあって、この京師つまり都の民を慈しみ、と解釈されている。このように周に関わる古典文献に「中国」が見られるようになる。

西周時代の政治は、後の中国における儒家の思想において理想とされ、その時代も理想とすべき時代と考えられ、その思想が東アジアの文化に与えた影響は大きい。たとえば、戦国武将の織田信長は、1567年に稲葉山城を占領し、井口と呼ばれていた城下町を岐阜と改めたが、それは周文王が岐山より起こり天下を定めた故事に倣ったものと言われている。最近の国立歴史民俗博物館の年代測定研究の成果を踏まえるとこの西周時代は、弥生文化の開始時期である早期および前期に比定され、夜臼1式・夜臼2a式・夜臼2b式・板付1式・板付2式な



第17図 何尊・何尊銘文拓本

どの型式時期に相当する。この頃、九州では佐賀県の菜畑遺跡の事例などから見て水田耕作が行われていたことは間違いない。しかし、中国の古代文明が間接あるいは直接的に日本の弥生文化に影響を与え、弥生文化の副葬品に青銅器が本格的に出現し、文字の使用が開始され、我が国が東アジア文明圏に含まれるまでにはしばらく時間がかかる。

一般的に中国史学においては、春秋時代の開始を前770年とし、戦国時代の終わりを前221年としているが、春秋時代と戦国時代の切れ目には、前477年と前476年の間に求める説や、前453年説などがあるが、考古学的にも前5世紀前半には、青銅禮器が減少し、陶製禮器が増加し、漆器が増加し、鉄器が出現してくるなど、文化的な大きな転換が認められる。

春秋戦国時代の遺跡数は、殷時代や西周時代の遺跡数に比較するとはるかに増加し、特に戦国時代に入ると遺跡の数が増え、多くの都城址など遺構の内容も複雑に成っている。また出土する遺物の種類も、土器・瓦當・青銅器・玉器に加えて、鉄器・漆器・木器などが増加し、青銅器の中には、従来の禮器・武器・樂器などに加えて鏡や貨幣などがあり、やがて青銅武器や青銅鏡や青銅貨幣は東アジアに伝播拡大していく。そのような中で、中原で流行した青銅の所謂桃氏劍は、中国東北地方夏家店上層文化の青銅劍および朝鮮半島から日本列島で発見される各種細形銅劍に、生産技術やその型式において影響を与えたと見ることも出来る。中国古代文明の遺物が、周辺地域に影響をもたらした古い時期の事例と言えるかもしれない。

春秋戦国時代の墳墓の主体部は、長方形竪穴土壙墓を基本とし、大型墓は1本ないし2本の墓道を有し、中型・大型の墓では一般的に木槨木棺の存在が認められる。陝西省宝鶏市鳳翔県で発見された前6世紀後半の秦公1号墓は、東西に墓道を持つ中字形墓で、全長約300mあり、墓室の竪穴覆土上に建築基壇を持っていた。基壇周辺からは瓦の出土もあり、墓上に寝殿などの建物が建っていたことは明らかである。類似した墓上建築遺構の例は、河南省輝県の固圍村の3大墓や河北省平山県の中山王墓、河北省邯鄲市の趙王墓においても発見されている。戦国時代の王陵においては墓上に寝殿などの建築物を造営する習慣は比較的一般的なことであった。前5世紀中葉墓とされる河南省固始県の侯古堆1号

墓は直径55m、高さ7mの墳丘を有していた。中国において春秋時代後期には、墳丘墓が出現していたと考えられるが、戦国時代に入ると墳丘墓の例が増大する。河北省の北辺に存在する燕国の墓も比較的大きな墳丘を有し、焼土・石灰・カラス貝などを伴う特異な主体部を有している。長江流域の楚墓においては、墓上建築の発見例は無いが、大型の墳丘が認められ、大きな木材を用いた木槨木棺が顕著で、湖北省荆州市江陵县や湖南省長沙市における楚墓の数は膨大なもので、楚の国力の強さを如実に示している。墳丘墓と墓における寝殿の出現は、秦漢時代以降の陵寢制度につながる初期の陵寢制の出現ととらえることができる。この陵寢制度は、後述するように後の時代の東アジアの古墳造営、特に墳丘造営に大きな影響を与えたものと推定される。

この頃、中国東北地方に、中原の西周文化、春秋時代文化と密接な関係を持ちながらも独自性の強い青銅器文化として先記した夏家店上層文化が出現し、存続する(第18図)。この夏家店上層文化の青銅器、ことに青銅剣の類は後の朝鮮半島の無紋土器文化・日本列島の弥生文化の青銅剣に大きな影響を与える。影響を受けた一例として韓国忠清南道牙山市の南城里遺跡出土の細形銅剣や多鈕粗紋鏡がある(第19図)。夏家店上層文化の成立は、中国古代文明の拡大から、東アジア文明の成立に到ったとすることが出来る。

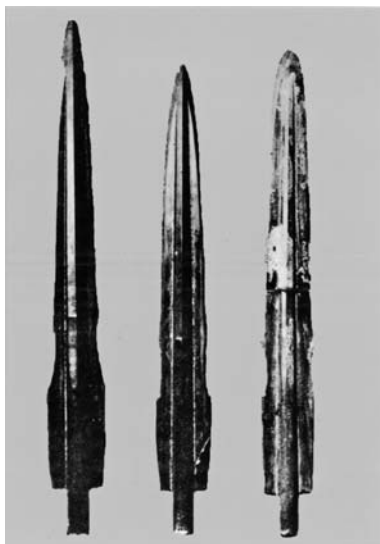
東アジアにおける鉄器の出現に関しては、その場所と時期に関して定説が定まらないようであるが、中国における鉄器の出現と使用の普遍化が大きな意味



第18図 陶鬲 夏家店上層文化

を持っていることは確かである。現在発見されている考古資料から見ると、春秋時代後期には鉄の製錬技術が確立していて、鉄器が道具として使用されていたことは明らかである。南京市六合区程橋遺跡、湖南省長沙市龍洞坡遺跡、湖北省常德市德山遺跡などからは人

工的に製錬された鉄から製作された鉄削・鉄鍬・鉄鏃などの遺物が発見され、最初的人工的な鉄の製錬は楚国で始まった可能性が高いとも言われている。⁽⁷⁾ 戦国中・後期に属する鉄製遺物を出土する範囲は、齊・燕・秦・韓・趙・魏・楚国などの領域におよび、それらの領域の鉄製遺物には、斧・鏃・鏃・刀・削・錐・犁・鏝・鍬・鋤・鎌・劍・戟・矛・鏃・鼎・盤などがあり、生産工具・武器・生活用具にいたるまで鉄で作られるようになってきている。しかし、鉄製品の中では依然として農具が多く、鉄製農具が各地に浸透していった状態をうかがうことがで



第19図 細形銅劍 南城里遺跡出土

きるが、武器遺物の発見例は相対的に少ない。鉄武器使用が広まるのは、戦国時代後期から秦漢時代に入ってからである。中国の鉄生産は、やがて中国古代文明の拡大と共に東アジアに広まり、人類文化の発展に大きな役割を果たすことになる。

春秋戦国時代は、諸侯・諸王どうしが覇権を争い、諸国間において多種の貨幣・度量衡・法律・文字が用いられ、思想的にも百家争鳴の時代であった。しかし戦国時代は、盛んな生産活動と経済活動が、都市の増加と拡大をもたらし、秦漢帝国としての国家統一への気運を高めたものと推定される。一方、春秋戦国時代における中国古代文明の拡大は、東北アジア・沿海州から朝鮮半島、ベトナムに達し、この地域に東アジア文明圏を形成する第1歩となっていたと考えられる。

3 中華文明の確立

秦は、商鞅の改革によって国力を増加し、東方の六国を次々と征服して、前

221年に中国を統一国家とした。秦始皇帝は、全国に郡県制を施行し、貨幣・度量衡・法律・文字などの統一も行った。秦始皇帝の後、前漢武帝は領土を拡大し、西はタリム盆地から東は朝鮮半島、北は蒙古高原から南はベトナムに到る広大な領土を有する漢帝国が東アジアに出現し、統一国家による統一した文化が確立する。この秦漢の統一文化の出現によって、都市国家に根ざしていた中国古代文明が終了し、古代中央集権国家の新しい時代に入ったと言える。

秦始皇帝は、過去に例のない巨大な陵墓を造営した(第20・21図)。始皇陵は、広大な陵域、巨大な墳丘、巨大な亜字形の堅穴墓室、広い陵園、多数の陪葬坑や俑坑を有し、その後の中国皇帝陵の範と成るものであった。秦始皇帝が行った皇帝陵の造営は、漢王朝に引き継がれ、劉邦の長陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵の造営につながっていく。始皇帝陵の陵墓造営の伝統はある意味では清朝まで続いたとも言える。この中国における陵墓造営の思想は中華文明として東アジア諸国へ各時期を通じて伝播し、巨視的に見ると遠く日本の古墳文化もその起源は始皇帝陵などの中国墳丘墓の伝統下にその起源があると見ることが出来る。

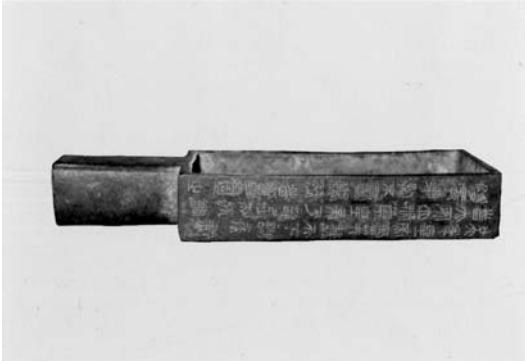
始皇帝の篆書への文字の統一は、漢の隷書をへて今日用いられている漢字への出発点となっている(第22図)。始皇帝以前の文字資料は甲骨文や金文に代表されるように宗教的な占い、あるいは祖先の偉業などを記載したものが多く、始皇帝以降の文字は国家統治のための法律・思想・記録に用いられ、文字の使用目的が大きく変化している。前漢武帝の時代に『史記』が編纂され、以後、中国の正史が残るようになる。秦漢時代の出土文字資料としては、湖北省孝感市雲夢県睡虎地出土の戦国末年から始皇帝時代の竹簡、湖南省長沙市馬王堆漢墓出土の葬送に用いた竹簡、山東省臨沂市銀雀山出土の孫子兵法・孫臏兵法などの竹簡、滇王金印・南越王金印・広陵王金印の印章類、各地で出土している封泥など無数の文字資料が知られる。紙は、すでに前漢に存在していたと考えられ、紙の使用とあいまって文字の使用は、前漢武帝時代以降きわめてひろく普及したと考えられる。秦漢時代には文字の使用が、殷周時代の甲骨文・金文とは比較にならないほど一般化し、やがて中国の漢字遺物(漢字が鑄造されている漢式鏡・貨幣・印章など)が東アジアに拡大していった。日本発



第20図 秦始皇帝陵



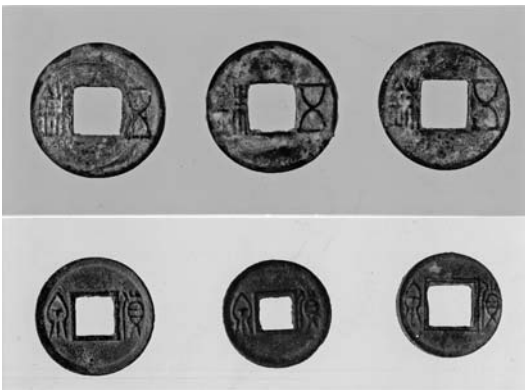
第21図 秦始皇帝陵兵馬俑坑



第22図 始皇帝二十六年詔方量・篆書

見の漢字遺物は、漢代に製作された遺物に始まるとも言える。

始皇帝は貨幣の統一を行い、戦国時代に各国で流通していた刀銭・布銭・各種円銭の類を廃止し、半兩銭を流通させた。秦半兩は大半兩とも呼ばれ、青銅の重さを実質的な価値とする実体貨幣であったと言われている。前漢の前186年に発行された八銖半兩や前175年以降発行された四銖半兩は、名目貨幣であったとも言われている。前漢の武帝は、前119年に五銖銭を発行しているが、これは完全な名目貨幣で漢王朝の経済的信用を裏付けとしていた。漢王朝が行った名目貨幣を発行する経済政策は、漢王朝が発行貨幣に見合う実質的な富を有していなくとも貨幣の発行が可能な革命的な経済政策であった。いずれにしろ春秋戦国時代を通して長く採用されてきた実体貨幣の政策が、秦漢時代に至って名目貨幣に変化したことは事実である。名目貨幣としての青銅貨幣の出現も、考古学的遺物に現れた古代文明の終了を示す現象である。また、それらの半兩銭・五銖銭は、少量ではある



第23図 五銖銭・貨泉

が日本列島にもたらされている (第23図上段)。

戦国時代には相当の鉄製農工具が使用されたが、鉄製武器の使用が普遍化するのは秦前漢に入ってからである。前漢の武帝時代に入ると鉄製農工具と武器の著しい増産が開始される。戦国時代の冶鉄業では比較的

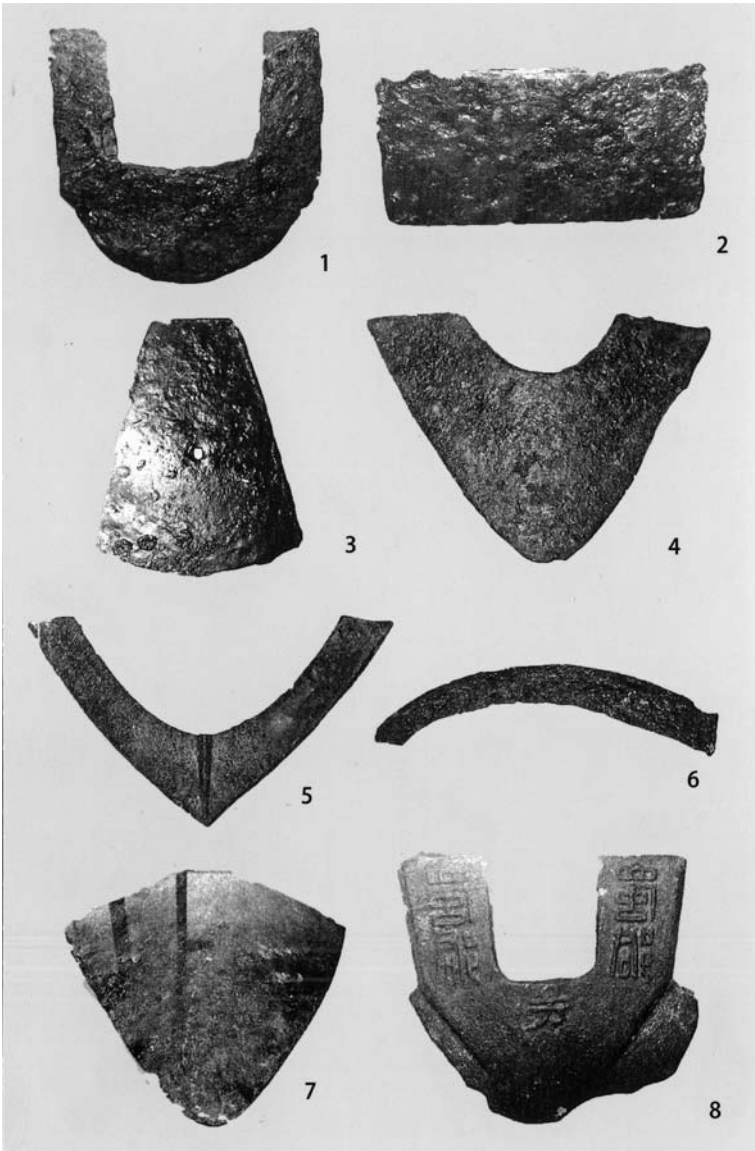
が日本列島にもたらされている (第23図上段)。

戦国時代には相当の鉄製農工具が使用されたが、鉄製武器の使用が普遍化するのは秦前漢に入ってからである。前漢の武帝時代に入ると鉄製農工具と武器の著しい増産が開始される。戦国時代の冶鉄業では比較的

多くの農工具を生産し、少量の鉄製武器を生産した。漢初に入ると鉄製の長剣・長矛・環首大刀が青銅剣・青銅鎌・青銅戈と伴出し、鉄製武器が、しだいに青銅武器にとって変わっている。鉄の出現は春秋時代まで溯るが、古代文明の要素の一つとした青銅の利器が、完全に鉄製の利器に変わるの、本質的な意味においては前漢に入ってからである。山東省の臨淄故城における漢代の冶鉄遺跡の面積は400000m²以上で、これは戦国時代齊国の臨淄故城における冶鉄遺跡面積の8~10倍に当たり、このように漢代に冶鉄遺跡の規模が拡大する傾向は多くの遺跡で確認されている。河南省鞏義市で発見された鉄生溝製鉄遺跡は、20000m²の面積を有し、鉍石加工場・冶煉炉・鑄造炉・住居址などの遺構が発見されている。漢代の鉄生産技術は、鍛造のほか鑄造において優れた技術を有していたことが知られ、製鉄関係の遺跡・遺物は、漢代が本格的な鉄の時代に入っていたことを明確に示している。後漢時代に入ると、鉄器の使用が一般的になり、また中国全土に広がり、鉄製品のみならず製鉄の技術も中国領内から外へ出て、東アジアに拡大していったと考えられる(第24図)。日本佐賀県の吉野ヶ里遺跡出土の鉄製空首斧には、戦国漢代の燕地で作製されたと推定される遺物が存在する。⁽⁸⁾

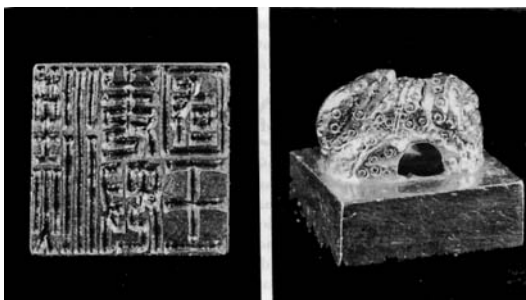
多くの漢式鏡が弥生時代の遺跡から発見されている。それらの漢式鏡には、四乳雲雷紋鏡・草葉紋鏡・連弧紋銘帶鏡・博局紋鏡などきわめて多種である。漢代、特に後漢時代に入ると、漢の文化は、広く東アジアに拡大し、周辺国の漢王朝に対しての朝貢外交が開始される。後漢の光武帝が、倭の使いに与えたと考えられている志賀島発見の「漢委奴国王」金印などがそれを示している(第25図)。王莽の新によって発行された貨泉は、日本での出土量も多い(第23図下段)。

日本へ漢字が伝わったのは、『古事記』によれば応神天皇の時、5世紀の初めと伝えられているが、漢字に対する知識はさらに早い時期から伝播していたと推定される。「漢委奴国王」金印の後、日本の古墳時代の鉄刀・剣類には漢字が金銀で象嵌された物がある。石上神宮の七支刀は百濟からの贈り物と言われるが、最初の2字に関して「泰始(西晋・南朝宋)」、「太和(魏・東晋・北魏)」などに読む議論がある。東大寺山古墳出土の鉄剣には、「中平」と後漢の年号に当



第24図 鉄製農具 1・2・8. 鍬、3. 鋤、4・5. 犁、6. 鎌、7. 鐮、前漢・後漢時代

たる単語があることにより、中国・朝鮮の製品とする考えもあるが、江田船山古墳や稲荷山古墳出土の鉄刀・剣には、反正天皇あるいは雄略天皇と考えられる人名があり、日本人がすでに漢字を理解していたと解釈される。この頃、日本列島も東アジア文明の一翼を担うようになっていた。



第25図 「漢委奴国王」金印

我が国が弥生時代に入ったのは、近年の国立歴史民俗博物館のC14年代測定研究によれば、前800年頃、西周第4・5期頃と言うことになるが、文明段階に入ったのは、弥生時代後期から古墳時代である。

4 おわりに

東アジア地域には、風土・生業・言語などに多様性を持ちながらも、粟・稲栽培、宗教、禮制、漢字など共通の文化によって結ばれた東アジア世界が形成され、独自の歴史的世界を展開してきた。その中心となってきたのは中国で、その古代文明の源流は黄河・長江流域に発生し、黎明期は夏殷周三代の時代である。秦漢帝国が出現することによって、中国における文明の黎明時代は終了する。朝鮮半島においては、無紋土器時代から原三国時代に文明段階に達したと考えられる。秦漢帝国時代、我が国は弥生時代中期から後期に入り、弥生時代後期から古墳時代に到って文明段階に達している。

註

- (1) 天下文明なるなり。
- (2) 馬王堆3号漢墓出土帛書の『易経』には、文言伝は見られない。

- (3) 戊申に卜して王貞う、中商稔りを受けられんか。
- (4) この中國に宅ずる。
- (5) 皇天既に中國の民とその疆土とを先王に付す。
- (6) 此の中國を恵しみて。
- (7) 中国社会科学院考古研究所、1984、『新中国的考古發現和研究』（『考古学專刊』甲種第十七号）。
- (8) 中国社会科学院考古研究所、2010、『中国考古学 秦漢卷』（『考古学專刊』甲種第三十二号、999頁）。

插图出典目録

- 第1図 土器：筆者写真。
- 第2図 土器：金元龍（西谷正訳）1972、『韓国考古学概論』（東出版株式会社、第11図）。
- 第3図 石器：筆者写真。
- 第4図 骨耜：筆者写真。
- 第5図 彩画蟠龍紋陶盤：筆者写真。
- 第6図 金属器：筆者写真。
- 第7図 二里頭遺跡景観：筆者写真。
- 第8図 夏王朝青銅器：筆者写真。
- 第9図 牙璋 1：中国社会科学院考古研究所二里頭隊、1983、「1980年秋河南偃師二里頭遺址發掘簡報」（『考古』1983年第3期、図版1）。2：中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭 1959年～1978年考古發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号、彩版2）。3・4：四川省文物考古研究所、1999、『三星堆祭祀坑』（文物出版社、図93・67）。
- 第10図 排水溝發掘：筆者写真。
- 第11図 体育運動場M93号墓發掘：筆者写真。
- 第12図 司母戊鼎：筆者写真。
- 第13図 甲骨文 1.乙編867：董作賓、1948～1953、『小屯（河南安陽殷墟遺址之一）・第二本・殷墟文字・乙編・上・中・下輯』（『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所）。2.中国国家博物館：筆者蔵写真。
- 第14図 甲骨文 1・2：郭沫若主編・中国社会科学院歷史研究所編、1977～1982、『甲骨文合集』第1～13冊（中華書局）。
- 第15図 甲組建築址：筆者写真
- 第16図 祝家巷北地点發掘：筆者写真。
- 第17図 何尊：筆者写真。何尊銘文拓本：唐蘭、1976、「何尊銘文解釈」（『文物』1976年第

1期、図1)。

第18図 陶甬：筆者写真。

第19図 細形銅劍：Kim Won-Yong, 1983, Recent Archaeological Discoveries in The Republic of Korea, Unesco. Fig.12.

第20図 秦始皇帝陵：筆者写真。

第21図 秦始皇帝陵兵馬俑坑：筆者写真。

第22図 始皇帝二十六年詔方量・篆書：筆者写真。

第23図 五銖錢・貨泉：筆者写真。

第24図 鉄製農具：筆者写真。

第25図 「漢委奴国王」金印：Keiji Imamura, 1996, Prehistoric Japan, London. Fig. 14.5.

引用文献目録

郭沫若主編・中国社会科学院歴史研究所編、1977～1982、『甲骨文合集』第1～13冊（中華書局）。

金元龍（西谷正訳）1972、『韓国考古学概論』（東出版株式会社）。

四川省文物考古研究所、1999、『三星堆祭祀坑』（文物出版社）。

中国社会科学院考古研究所、1984、『新中国の考古発現和研究』（『考古学専刊』甲種第十七号）。

中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里头 1959年～1978年考古発掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第五十九号）。

中国社会科学院考古研究所、2010、『中国考古学 秦漢卷』（『考古学専刊』甲種第三十二号）。

中国社会科学院考古研究所二里头隊、1983、『1980年秋河南偃師二里头遺址発掘簡報』（『考古』1983年第3期）。

董作賓、1948～1953、『小屯（河南安陽殷墟遺址之一）・第二本・殷墟文字・乙編・上・中・下輯』（『中国考古報告集之二』中央研究院歴史語言研究所）。

唐蘭、1976、『何尊銘文解釈』（『文物』1976年第1期）。

Keiji Imamura, 1996, Prehistoric Japan, London.

KIM WON-YONG, 1983, Recent Archaeological Discoveries in The Republic of Korea, Unesco.